‘ὁ κόσμος, ἀλλοίωσις· ὁ βίος, ὑπόληψις.’

114号 1998.10.4

文・編集・発行
恋 怪子

LIVE：FREE　1998.7.22 高田馬場 AREA

PHOTO BY SUMIKO

はじめに音がでた瞬間にぐっと気持ちをつかまれ、聴いていくうちに、ぐんぐんと歌の世界、音楽の世界にひきこまれていった。頭のなかが冴えざえとしてきて、すっかり忘れていたことがあるということに気がつかされた。。

ちゃんと自分の目でものを見つめ、自分の耳でものを聴き、自分の心で感じること。こんな大切なことを忘れはてて、ぼんやりと日々をすごしていた。なまけていた。それに気がつかされた。ジュンの歌には、こんなふうに人を覚醒させる力がある。それは、狂乱のとき以来かわらないが、ＦＲＥＥでは、狂乱のときの“突き刺さってくる”というのとちがった覚醒力がいい感じだった。それは、ジュンの歌が、それまでのような“叫び”から、“歌”に変化していたからだと思う。苦しげがところがなくなって、のびやかな声が心にじんじんとしみわたってくる。

私は、ジュンは詩を歌にして歌うより、朗読をしたほうがあってると、狂乱の頃から、ずっとそう考えていたのだが、ＦＲＥＥのこの日のライブを聴いて、その考えを改めた。

それに、ギターのＪＵＮが、ジュンの歌をガーッと前面におしだすとともに、自分のギターも、コーラスも前面におしだすのだから、そのものすごさといったら……。二人とも、自分のもてるものすべてを、歌うこと、演奏することに投入している。圧倒的な覚醒力だった。

そして、聴いているあいだは、そういう感じはまったくなかったが、その二人の発する力が、滝のように私を打っていたのにちがいない。ライブがおわって、客席があかるくなったとたん、全身がぐったりと重く感じられて、テーブルにつっぷしてしまった。その場所にいるのが自分一人だったら、大声で泣きだしていたと思う。こみあげてくる塊の行き場は、きっとそれしかなかったはずだ。こみあげてくる塊をのみこんだせいで、体はいつまでも重いまま。けれども意識ははっきりと覚醒していて、心臓のドクドクという音を聴いていた。

ジュンは、「きっとそのために言葉がある／きっとそのために歌がある」と歌った。ほんとうに、こういうことのために言葉が、そして、歌があるのだということを強烈に実感した。けれども、これを言葉と、これを歌というなら、他の言葉は、他の歌は、いったいなんなのジュンは、「**俺はお前の殻をやぶる／お前は俺の殻をやぶれ**」とも歌った。たしかに、ジュンは私の殻をみごとにやぶった。それにひきかえ、私はジュンの殻をやぶるほど鋭く生きているか？この日のＦＲＥＥは、時間の最前線にいた。一秒、一秒、時を刻んでいる時計の、その秒針の先端にいた。時間の最前線。最前線の現在。そこから、私を覚醒させ、私の現在を鋭く見つめさせ、“**いまのいま**”**を生きることは可能なのだ**、ということを私に示した。

考えてみよう

（浜田寿夫）

ＧＬＡＹが大人気であるが、そのことの理由が大人には判り難い。何となれば、ＧＬＡＹならばこその特徴といったものがなかなか捜しづらい、際立って美形のオトコがいるとか、歌い方や演奏法がユニークだとか、ひとことでその存在をひやかせるようなものが、このバンドには見当たらぬからである。

あえてひやかすとしたら、このヴォーカル（ＴＥＲＵという）は、誰が見ても氷室京介のマネに見える。歌いながら絶えず自分を紹介しているような右手のさばきを代表とする、しぐさの作り方一般、影絵にしたらどちらがどちらと見分けがつかぬほどではないか。

それこそが、人気の大きな原因なのではないか。私はそう思った。ロックという文脈で観察するのをやめてみたのである。

氷室京介は、一代でそのかたちを完成させた。それは〝和〟の血の濃い所作を、如何に今様のリズム／ビートと融合させるかという問題に対しての、抜きん出て優れた答であった。氷室京介の編み出したかたちには、ある種の普遍性を認めぬ訳にはいかない。という意味では、市川猿之助〝スーパー歌舞伎〟以上に無理のない方法で、文化の伝承を果たしたともいえるぐらいである。

よく、メイキャップのことから、歌舞伎との比較がなされがちな〝ビジュアル系〟だが、私はむしろ、しぐさの見せる奥しさの方向性に、芸としての類似性があると考えている。そしてその創始者が氷室京介だと思うのだ。

続く若者達が、それに対抗するのでなく、そのかたちを守り自己表現しようとする、正にこの国ならではの、ひとつの「道」が、氷室京介以降出来上がってしまった。電気増幅された音がどれほど刺激的であっても〝ビジュアル系〟はロックとは別な純日本風な「芸事」となった。つまりそこではすでに、かたちの受け継ぎ方に、どのような「美」そして「力」が備わっているのかが、何より尊ばれる。ストレートなパワーとオリジナリティが評価の基準たる「ロック」と競い合う土俵がもう違うのだ。「週刊文春」より

LIVE：ロンサム・ダヴ・ウッドローズ　1998.8.11 下北沢 SHELTER

この日、ロンサム・ダヴ・ウッドローズ（以下ウッドローズ）は楽しいライブをやっていたのだけれど、観客はみんな床にあぐらをかいて、ステージを見上げるようにして聴いていた。

観客のなかにはメンバーの友だちのような人たちも多くて、演奏のあいまにヴォーカルの人がその人たちとしゃべったりしていたのに、なんか静かな感じがあたりに漂っていて、そのふんいきがとてもよかった。ライブの後半に、ギターのチューニングをしながらヴォーカルの人が、「なんで、そんなふうに黙ってるんだよ。夏休みでどっかに行ったとかさ、なんかお互いに話すことがあるだろう？」。観客にむかってそういったあとで、「**そんなに真剣に聴くもんじゃないだろう、こんなもの**」って、ぼそっといったのだ。

「そりゃ、そうかもしれないね。ロックンロールなんて、ただ楽しめばいいんで、真剣に聴くものじゃないかもしれないよね。だけどね、ウッドローズが、こんなふうにやるから、こっちは真剣に聴いちゃうんだよ。そっちが真剣にさせてるんだよ」って、私は、心のなかでそう答えていた。

たしかに、ロックンロールは“こんなもの”っていうようなものかもしれない。乱暴にいってしまえば、“生きていくのにぜったい必要なもの”ってわけじゃない。

ずっと以前に、文学者たちのあいだで、「文学で飢えた人を救えるか？」という議論がなされたことがあったが、たしかに飢えている人にとっていちばんの救いは食べものだ。けれども、心の飢えをかかえている人にとって、食べものは救いにならない。そうしたとき、文学や音楽が大きな救いになることは、だれでも体験して知っていることだろう。ロックンロールだって救いになる。

私は、ウッドローズのロックンロールを聴くと、いつも心の飢えが満たされる。

そして、もしかしたら、飢えている人にとっても、文学や音楽が、たとえいっときであっても、救いになることがあるかもしれない。

ウッドローズがやっているのは、聴いていて自然と体がゆれてくる、これこそロックンロールといえるノリのいいロックンロール。それが楽しいんだけれども、楽しいのと同時に、“生きていることの哀しみ”も感じとれるところがウッドローズの大きな魅力で、実感に裏打ちされた歌詞と、それをじゅうぶんに生かすことができる演奏力があるからだということが、よくわかる。

5月9日のＡＲＥＡのライブのとき、ピストルズの『プリティー・ベイカント』のカバーをやって、それがとってもよかったのだけれど、『プリティー・ベイカント』に、「We Don't Care!」という歌詞がある。ウッドローズにも、「I Don't Care！」という歌詞のある歌がある（『GO BACK TO DREAM』）。

こういう「I (We) Don't Care！」って、「ウルセー」とか、「カンケーネー」っていう捨て台詞のような感じがする言葉だけど、ウッドローズの歌を聴いていると、それがどういうところからでてくるのか見える気がする。

きれいごとや、うまいことをいって、たがいにだましあい、おとしめあっている現実生活。そこでまともにやろうとしたら、傷つかずにはいられない。そういう現実生活にたいしての「I Don't Care！」だから、ウッドローズに感じとれる“生きていることの哀しみ”は、まともにやろうとするとどうしても負うことになる“現実生活での傷”であるともいえる。

「足にまといつく何かは／相変わらずだけど／そんなに悪くもないのさ」（『WALKIN' IN THE WIND』）、「不似合いなその歩き方は／誰もがうんざりしているのさ／うすら寒いでまかせを／思い付くのが得意なんだな」（『FAKEMENT COOL』）

そんな現実生活なんて「I Don't Care！」。それより、“こんなもの”（ロックンロール）で楽しくやろうぜ！これこそがウッドローズ！

だけど、やっぱり真剣に聴いちゃうよね、こんなにすてきな“こんなもの”ならね。だって、まともに生きていくための、心の種になるんだもんね。

FAKEMENT COOL

あきれ果てて物も言えないぜ
中身の無いたわ言バラまいて
安いメッキがはがれ落ちるのは
あんたが思ってるより早いのさ

軽いアタマ　棚に上げて　重いフリはやめなよ　Hey Hey Hey

見当違いで吹き上がってる
どこもかしこも穴だらけさ
どこまで行っても変わりは無いのかい？
そろそろ辺りを見回せよ

全く取り得を　はきちがえてるぜ　Hey Hey Hey

タカをくくったあてが外れて
千鳥足だぜ　Fakement Cool
タカが知れてる足元は
気取りすぎてカラ回りさ
Too Much Fakement Cool

居場所探しにウロついた所で
ふてくされて帰るのがオチだろう
取り戻したつもりでいても
そんなに　たやすくはないのさ

ツギハギだらけで　やりきれないぜ　Hey Hey Hey

不似合いなその歩き方は
誰もがうんざりしているのさ
うすら寒いでまかせを　思い付くのが得意なんだな